

ASIAN AND MIDDLE EASTERN STUDIES TRIPOS Part IB  
Japanese Studies

---

Friday 28 May 2010

13.30 – 16.30

---

**J.7 LITERARY JAPANESE**

Answer *both* sections and *all* questions

Write your number *not* your name on the cover sheet of *each* Section booklet.

**STATIONERY REQUIREMENTS**

20 page Answer Book x 1  
A Rough Work Pad

You may not start to read the questions printed on the subsequent pages of this question paper until instructed that you may do so by the Invigilator

## SECTION A

- 1 Translate the following passage into English, adding notes where you think they are needed. The Japanese headnotes are merely for reference. Note the vocabulary items at the end [35 marks].

四 南都七大寺の一。法相宗の大本山。唐招提寺とともに奈良市西の京にある二大寺の一。天武天皇の発願によりもと藤原京に完成(六九八年)。平城の遷都のち現在地に移る。金堂の薬師三尊を本尊とし、東塔の三重塔とともに美術史上にも秀作として著名である。  
 五 「別当」は大寺の寺務を統轄する僧官。最上位に位する長官。↓九  
 九〇注七。「今昔」には「濟源僧都」と明示する。「僧綱補任抄出」上によれば、権少僧都濟源は三論宗薬師寺別当、東大寺義延弟子とあり。天徳四(六〇)年四月五日没、七十六歳。さらに同書には濟源が一生念仏を事とし、薬師寺別当のとき用いた米五石を、臨終のとき同寺に寄進した旨を追記する。  
 六 「元亨釈書」卷五、卷十。「本朝高僧伝」卷八などの記述により、「薬師寺延義」と改むべきものと思われる。  
 七 極楽浄土。↓八〇注三。  
 八 「くわしや」ともいう。生前に悪事を行なった亡魂を、地獄に運ぶ火の燃えた車。  
 九 底本「むきたるぞ」。書陵・陽明・九大・蓬左本により改める。



は、「さばかりの罪にては、地獄に落つべきやうなし。その物を返してん」といへば、火車を寄せて待つなり。

### 三 薬師寺別当の事

今は昔、薬師寺の別当僧都といふ人ありけり。別当はしけれども、殊に寺の物も使はで、極楽に生れん事をなん願ひける。年老い、病して、死ぬるきざみになりて、念仏して消え入らんとす。無下に限と見ゆる程に、よろしうなりて、弟子を呼びていふやう、「見るやうに、念仏は他念なく申して死ぬれば、極楽の迎いますらんと待たるに、極楽の迎は見えずして、火車を寄す。『こはなんぞ。かくは思はず。何の罪によりて、地獄の迎は来たるぞ』といひつれば、車に付きたる鬼どものいふやう、「この寺の物を一年、五斗借りて、いまだ返さねば、その罪によりて、この迎は得たるなり」といひつれば、我いひつる

question continues...

一石(十斗)の米を読経料として寄進する。五斗借りた倍の分を代償として払うことになるが、それに納得する鬼どもに人間臭さが反映する。

二「いひければ」の直接の主語は僧部。このあたりの文脈に非論理的な話しことばの要素が濃く感じられる。

三正門、寺などの総門。→一四〇注六、『今昔』に「東ノ門ノ北ノ脇」。

四底本「むかひ」。書陵・陽明本により改める。

※本話は『日本往生極楽記』、『今昔物語集』巻十五第四話に出る。前者の記述は簡略であり、鬼との対話や火の車のことはない。とにかく返済すればすむという考えや、その倍の一石を寄進するというあたり、地獄の沙汰もなんとやらで欲得ずくの面もうかがえておもしろい。この説話の焦点は結語の示すように、寺物を私用すれば地獄に落ち、苦報を受けるというところにある。この通念は巻九第七話や、諸種の往生伝類などにも散見する。

さればとくとく一石誦経にせよ」といひければ、弟子どもも手感ひをして、いふままに誦経にしつ。その鐘の声のする折、火車帰りぬ。さてとばかりありて、「火車は帰りて、極楽の迎今なんおはする」と、手を摺りて悦びつつ終りにけり。

その坊は薬師寺の大門の北の脇にある坊なり。今にその形失せずしてあり。さばかり程の物使ひたるにだに、火車迎へに来たる。まして寺物を心のままに使ひたる諸寺の別当の、地獄の迎こそ思ひやられるれ。

別当僧都	Abbot and Assistant High Priest
無下に	absolutely
鬼ども	demons
五斗	five to = 90 litres (of rice)
一石誦経	a sutra reading costing 180 litres (of rice)

'Yakushiji no bettō no koto', *Uji sh i monogatari* (NKBZ, vol. 28), pp. 175–76.

(TURN OVER)

## SECTION B

Candidates should answer all the following questions:

2 Provide a gloss for each of these poems (and their headnotes where applicable) [25 marks].

春たちける日よめる

紀貫之

2 袖<sup>そで</sup>ひちてむすびし水のこほれるを春立つけふの風やとくらむ

亭子院の御屏風の絵に、河わたらむとする人の、もみぢの散る木の  
もとに、馬をひかへて立てるをよませ給ひければ、つかうまつりけ  
る

305 立ちとまり見てを渡らむもみぢばは雨と降るとも水はまさらじ

文集嘉陵春夜詩「不明不暗朧々月」といふ  
事をよみ侍りける

大江千里

55 てりもせず曇りもはてぬ春の夜の朧月夜にしく物ぞなき(有・定・陸)

245 橘のほふあたりのうたゝねは夢も昔の袖のかぞする

皇太后宮大夫俊成女

和歌所の開闔になりて、はじめてまゐりし日、奏  
し侍りし

源 家長 長盛

741 もしほ草かく共つきじ君が代の敷によみおくわか(を)のうらなみ(有)

Kokinsh , poems 2, 305; Shinkokinsh , poems 55, 245, 741.

- 3 Translate the following passage into English, adding notes where you think they are needed. The Japanese footnotes are merely for reference. [25 marks].

ヲホカタ、コノ所ニ住ミハジメシ時ハ、アカラサマト思ヒシカド  
 モ、今スデニ、五年ヲ経タリ。仮ノ菴モヤ、故郷トナリテ、簷ニ朽  
 葉フカク、土居ニ苔ムセリ。自ヅカラ事ノタヨリニ都ヲ聞ケバ、コ  
 ノ山ニ籠リ居テノチ、ヤムゴトナキ人ノカクレ給ヘルモ、アマタ聞  
 ゴユ。マシテ、ソノ数ナラヌタグヒ、尽クシテコレヲ知ルベカラズ。  
 タビ／＼炎上ニ滅ビタル家、又イクソバクゾ。タゞ、仮ノ菴ノミ  
 長閑ケクシテ、恐レナシ。ホド狭シトイヘドモ、夜臥ス床アリ、昼  
 居ル座アリ。一身ヲヤドスニ不足ナシ。カムナハ、小サキ貝ヲコノ  
 ム。コレ事知レルニヨリテナリ。晝ハ、荒磯ニ居ル。スナハチ人ヲ

一日野山の草庵。  
 ニほんのしげらくと軽い気持であったが。「暫シバラ  
 ク・カリソメ・アカラサマ(名義抄)。  
 三方丈記執筆の年から逆算すれば、五年前は承元元年  
 (二〇七、長明五十三歳)。  
 四次第に住み慣れた故郷となつて。「やや。微也、や  
 うやう也(興義抄)。「ふる里とは、住みうかれたる里  
 也。又、あからさまにたち離れても、本の家をも云ふ  
 也。又、住みながら年久しくなりて破れたる家をも詠  
 めり(類注密勘)。「故郷(註)に品々あり。古き都を故  
 郷と云ふ。又、今住む里の旧(よりたるをも云ふ。又、  
 旅に出し我方を故郷とも云ふ(連珠合璧集)。底本以  
 外の本文はすべて「ふるや(古屋)」となつてゐるが、  
 「住みながら年久しくなりて破れたる家」今住む里の  
 旧りたるこの意で「フルサト」と書いた所に注目しなけ  
 ればならない。感慨の度合が違ふ。  
 五 たまたま、ふとした機会に、都の様子について人の  
 語るのを耳にしたところでは、「事ノタヨリニ人ノ語  
 ルヲ聞ケバ(発心集五)。  
 六 日野に籠つてから方丈記執筆まで約五年間に、九条  
 兼実(承元元年四月)、嫡子内親王(同二年九月)、皇太后  
 忻子(同三年八月)、坊門女院範子(同四年四月)、八条女  
 院暉子(建暦元年六月)、春華門院昇子(同年十一月)そ  
 の他、多くの貴人が世を去つた。  
 七 全部洩れなく知ることができない。漢文訓読調。  
 八 諸本「度々」の炎上」。  
 九 一五頁注二四  
 一〇 ヤドカリ。巻貝の殻に住む節足動物。「かみな」の  
 転。「寄居カミナ(名義抄)。「寄居之虫如螺而有脚  
 形似蜘蛛。本無殼。入空螺殼中。載以行。触之縮  
 足如螺閉戸也。火炙之乃出走。始知其寄居也」  
 (西陽雜俎・続集八)。「寄居」の字は仮住まいの意。池  
 亭記にも「子、本居処無シ、上東門ノ人家ニ寄居ス」と  
 ある。  
 二 事の道理を知っているからである。底本以外の諸

Question continues...

(TURN OVER)

恐ル、ガ故ナリ。ワレ、マタ、カクノゴトシ。事ヲ知リ、世ヲ知レバ、欲ハズ、趨ラズ。タゞ、シヅカナルヲ望トシ、ウレヘ無キヲ樂シミトス。

惣テ、世ノ人ノ栖ヲツクル習ヒ、必ズシモ事ノタメニセズ。或ハ妻子・眷屬ノ為ニツクリ、或ハ親昵・朋友ノ為ニツクル。或ハ主君・師匠、及び財宝・牛馬ノ為ニサヘコレヲツクル。ワレ、今、身ノ為ニムスベリ。人ノ為ニツクラズ。故如何トナレバ、今ノ世ノナラヒ、此ノ身ノアリサマ、伴ナフベキ人モナク、頼ムベキ奴モナシ。縦(タトヒ)横(ヒロ)クツクレリトモ、誰(タレ)ヲ宿(ヤド)シ、誰(タレ)ヲカ居(ス)ヘン。

本、「事」を「身」に作る。  
 三 海浜に棲み、魚類を主食とする猛禽。「筑紫へ下りけるに、たかとみといふ所にて、みさこの魚(心)取りけるを見てよめる。夕まぐれ鷹と見れば荒磯の波間を分くるみさこなりけり」(散木奇歌集・旅宿)。この前後、池亭記の「蝸ハ其舎ヲ安ンジ、虱ハ其縫ヲ樂シム。…参照。  
 三 事の道理を知り、世の現実を知っているので。この「事」も、諸本「身」。  
 四 世俗の名利を求めず、名聞のために奔走しない。「ワシル」は「走る」意。漢文訓読系の語。「世務勞心非富貴」人生実事は欲娘 白(千載佳句・閑適)。  
 五 「シヅカナルヲ望トシ、ウレヘ無キヲ樂シミトス」という、大切な事のためにするのはない。底本の「事」、これも諸本「身」。  
 六 親近者や友人。「親昵 シンヂツ」(色葉字類抄)。「朋友 ボウイウ(同心・知音・断金・連璧)(同上)。  
 七 自分のために小庵を作った。  
 八 「イカントナレバ、即ち、ナゼニトユウニ。このことの意味は…である」(日葡辞書)。「ユエライカントナレバ」(日本大文典)。漢文訓読語。  
 九 当世の常態。  
 一〇 伴侶となるべき妻もなく、(私を)主人と頼むべき従者もない。

二七頁・二五、五五〇。寛文川元石。

